水津一朗先生を偲ぶ

本会元理事長、奈良大学元学長、京都大学名誉教授、文学博士、水津一朗先生は、平成八年四月八日、城陽市内の病院で、心不全のため逝去された。享年七三歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は、大正一二年一月一日、山口県吉敷郡宮野村(現山口市)にお生まれになり、旧制山口中学校、山口高等学校を経て、昭和一七年一〇月京都帝国大学文学部史学科に入学されたが、当時戦火は日に日に強まり、ついに昭和一八年一二月現役兵として入営され、復員されたのは昭和二〇年八月であった。その後直ちに大学に復され、昭和二一年九月には史学科地理学専攻を卒業、大学院に進学されて、この頃より、未開人の地図やトーテミズムの研究を手始めに、研究成果を次々と世に問われるようになった。昭和二七年四月、大阪市立大学法文学部(のち文学部)の専任講師として赴任され、創設間もない地理学教室の発展に尽力され、昭和三〇年四月には助教授に昇任された。さらに、昭和三四年四月に母校京都大学文学部に転勤され、織田武雄教授を助けつつ、伝統ある地理学教室の新たな発展に心血を注がれた。昭和四一年三月から一年間、文部省在外研究員として西ドイツおよびスウェーデンに出張され、特にフランクフルト大学のクレンツリン教授のもとで、ヨーロッパの集落地理学・歴史地理学の研究を深められた。昭和四六年三月には、「社会集団の生活空間」の研究により、京都大学より文学博士の学位を受けられた。昭和四六年一一月に文学部教授に昇任され、以後昭和六一年三月のご退官までの一四年余り、地理学教室を主宰されるとともに、昭和五十五年一月から三年間京都大学評議員、昭和五六年一月から二年間は文学部長の要職を歴任され、文学部の発展に尽くされた。ご退官に際しては、京都大学名誉教授の称号を受けられたが、ご退官後直ちに奈良大学文学部教授に就任され、地理学を講じられた。昭和六三年七月には、選ばれて奈良大学学長に就任され、平成六年三月まで約六年間、同大学の発展のため全力を傾けられた。

この間、先生は昭和五九年七月から二年間、本会の理事長を、昭和五一年一一月から四年間と昭和五九年一一月から二年間、人文地理学会の会長の大役をはたされたほか、日本地理学会、歴史

地理学会などの役員を歴任され、学界の発展に尽くされた。また昭和六〇年七月から六年間、日本学術会議会員の要職に就かれ、学術行政にも尽力された。さらに昭和五五年に日本で開催された国際地理学会議に際しては、地理学思想部会のシンポジウムを京都国際会議場で主宰されるなど、国際的にも活躍された。なお、奈良大学ご退職後は、請われて礪波散村地域研究所の所長に就任され、お亡くなりになるまで続けられた。これらのご功績により、ご逝去に際し、政府から勲二等瑞光章が授与された。

先生のご専門は、社会地理学、集落地理学、歴史地理学、地理学史研究、位相地理学など、広い範囲に及んでおり、ご著書も、『村落社会地理』(共著)、『社会地理学の基本問題』、『石の文化・木の文化』、『社会集団の生活空間』、『地域の論理』、『近代地理学の開拓者』、『ヨーロッパ村落研究』、『景観の深層』、『甦える地理の思想』など、多数に上る。このうち、『社会地理学の基本問題』は、「基礎地域」を基本に、階層的に構成されている大小の地域によって世界を捉えようとした、いわゆる「水津地域論」を体系的に展開されたものである。また、学位論文である『社会集団の生活空間』は、前著で示された体系を、より実証的・理論的に論じられたものであり、これら二書の学界に与えた影響は、測り知れないものがある。一方、『近代地理学の開拓者』は、ラッツェルを始めドイツ地理学派の巨匠達を、地域・空間・景観などの視点で再評価されたものであり、常に地理学の本質を追い求められた先生にとっては、避けて通れない作業であったと思われる。さらに、『ヨーロッパ村落研究』は、ドイツ留学の成果を基に、ヨーロッパ集落史上の諸問題を、実証的・歴史地理学的に論じられたものであり、わが国におけるこの分野の研究の最高水準を示すものであろう。加えて先生は、五十代後半から、難解な現代数学を駆使しながら、「位相地理学」を説かれた。『景観の深層』は、そのような試みを集成されたものである。

このように先生は、生涯を通じてなによりも「学問の人」であられた。一貫して地理学の本質の究明とその独自性の確立を追い求められた。また、地理学教室の維持・発展を最優先課題とされていた。先生は、山口県人特有の堅固な意志の力を備えていらっしゃったように思う。しかしながら、学生に対しては、先生はいつも温顔をもって接しられた。百万遍の喫茶店やレストラン、木屋町のビヤホールでの談論風発を、誰よりも楽しまれた。

その先生はもはや居られない。時には厳しく、しかし多くは温かであった懐かしいお顔も、見ることはできない。あまりにも早いご逝去を悔やみつつ、今はただ、先生のご冥福をお祈りするばかりである。

(石原　潤　記)